千葉創生　わがまち、未来へ

経営ノウハウを初歩から
中小企業の後継者不足解消

事業承継士、中小企業診断士の資格を持つ後継者塾の東條塾頭。「事業承継は新しいことに挑戦する好機」と語る

アルファバンクの後継者塾

地方創生のキープレーヤーの〝1人〟が、地元に根差した事業を展開する中小企業だ。その存在は地域経済の活性化や雇用の維持・拡大はもちろん、地域の特性やコミュニティーを保っていく上で欠かせない。地域の持続可能性を確保していくためには地元企業の後継者を育て、事業を発展的に承継していくことが求められている。

しかし、中小企業経営者の高齢化や後継者不足は全国的な課題。県内は経営者の平均年齢が全国平均を上回り、後継者の不在から廃業に追い込まれた優良企業もある。そこで京葉銀行は後継者不足を解消しようと昨年10月、経営のノウハウを初歩から学べる「アルファバンクの後継者塾」を開講した。

塾は▽自社を徹底的に知る▽経営者としての思考力を養う▽一生の仲間を作る―を目的に掲げ、今月20日まで月1回各4時間の計10回開催。製造、不動産、介護など多岐にわたる業種の40代を中心とした約30人が受講した。経営戦略やビジネスモデル、労務管理などについて、労務や財務に長けた事業承継士ら専門家による講義に耳を傾けた後、具体的事例についてグループごとに話し合い理解を深めた。

さらに、毎回、ビジネス書を課題図書として提示。翌回に発表するため、その日学んだことを自社に当てはめてリポートを書く宿題も出された。自社の現経営者にインタビューする課題も。伝統やブランド、人脈など自社が築き上げてきたソフトな経営資源を再認識するためだ。全10回の資料をまとめると、知的資産経営報告書に相当するファイルが完成するようにカリキュラムを組んだという。

京葉銀行が開校した「アルファバンクの後継者塾」。初回の講義には、事業承継センターの内藤博社長が講師を務めた＝2016年10月20日

「経営者には大局的な見方が必要だし、地元の仲間とのネットワークも重要になる。塾は学びとネットワーク作りの機会」と、事業承継士でありかつ中小企業診断士でもある東條裕一塾頭は話す。「事業承継というとネガティブなイメージがあるかもしれないが、実際は新しい経営者の下で経営を革新し、新しいことに挑戦する好機。もっとポジティブに捉えるべき」と説いた。

円滑な事業の承継は、各企業が基盤を置く地域の存続にも関わってくる。「地元企業が地域のランドマークになっている」と指摘するのは、塾の運営を委託され、東條塾頭も所属する事業承継センター（東京都港区）の内藤博社長。「地元企業が、郷土の風景や味を担っているケースや、雇用や税収などで地域の活力を生み出す源泉でもある。地域を守る意味でも、事業承継はその前後の時期も含めて、専門家による伴走型のサポートが必要だ」と強調した。

京葉銀行は今月25日から、後継者塾2期生の募集を開始する。担当者は「人材育成の支援も地域金融機関の役割の一つ。地元企業の存続を手助けすることで、持続可能な地域作りに貢献していきたい」と述べた。

大学環境ISO学生委員会

千葉大学環境ISO学生委員会を知っているだろうか。学生たちは大学の「環境・エネルギーマネジメントシステム」の運用を担いながら、そこで培った知識や経験を地域社会に還元し、地方創生に一役買っている。最近は京葉銀行との協同プロジェクトを立ち上げ、県民や企業の環境意識向上を目指した企画を検討中。学生たちの取り組みこつ

―学生たちはどのような活動をしているのですか？

岡山　学生委員会は2003年に発足しました。大学が取得した環境マネジメントシステムの国際規格「ISO14001」を運用、維持していく役割を主体的に果たしています。具体的に言うと、システムに関する基礎研修の講師や内部監査の実施、外部審査の対応などを担っています。也

行っています。また、中古自転車の修理・販売や緑のカーテンの作成、省エネイベントの開催など、大学内での環境活動にも取り組んでいます。

学外にも活動の幅を広げており、身近な所では地域と一緒に花壇を作る活動などをしています。09年には、より地域にアプローチしやすくするため、NPO法人格を取得しました。トロ学生に対象コン

―学生と地域の関わりはいかがですか？

岡山　大人が地域で出て行くより、学生たちが参加した方が地域の方も「一緒にやろう」という気持ちになってくれるのではないでしょうか。応援もしてくれるでしょう。

大学の近くの並木道に花を植える活動しているNPO法人があり、学生委員会も活動地域交流班ができた。地域で活動をしている人と触れ合うことで、学生たちは地域のニーズにじかに接することができます。これまで主に学内に目を向けていた学生たちが地域のニーズを知ると、ニーズに応えられるような活動をやりたいとの気持ちが高まってきます。

今、地域との交流がより活地域の方々にキャンパスに足を運んでもらい、楽しんでもらえるような内容を考えています。まだ構想段階ですが、学生が地域に出て行ったからこそ生まれた発想です。

また、大学周辺の自治会に学生委員会のことを知ってもらおうと、地域広報誌の発行を始めました。家庭への省エネ啓発も兼ねており、回覧板地域が元気になっていく一助になるのではないでしょ

―今後の活動の抱負は？

岡山　これまで以上に企業や自治体、地域と連携を深めていきたい。学生にとって学ぶ機会の拡大になります。地域にとってもプラスになるはず。学生と地域の方々が一緒に活動をしながらいろいろな話をする。いい関係が築けるし、地域が元気になっていく一助になるのではないでしょ

後継者塾を受講して

地元企業同士の連携強めたい

後継者塾1期生
岩本大成さん(40)

父親（72）が創業した三徳実業（船橋市）は県内外で不動産賃貸やレジャー施設運営などを手掛ける。常務取締役として営業などを担当する傍ら、来たるべき事業の引き継ぎに備え「経営の基礎、基本を学び、会社の基盤をより強くしたかった」と塾に申し込んだ。

大学時代に経営学や情報処理を学び、バレーボール部では2年間率先して主将を引き受け練習の改革に取り組むなど、学生時代から企業のトップに立つことをイメージ。「いばらの道でも進む」と将来への決意は固く、「創業者の作り上げた社風や文化を取り込みながら、いかに企業を社会の変化に合わせていくのか」を考えてきた。

塾に参加して「人材を育て『競合他社にまねできないチームワーク』を生み出す会社を目指したい」との思いを強める。「地域のにぎわいを生み出すのは、私たちのような地元の企業。塾で知り合った異業種の方々とのネットワークを広げ、地元企業同士の連携を強めることが、地域の活性化つなげられたら素晴らしい」と笑顔を見せた。

熱い思いで経営にチャレンジ

後継者塾1期生
黒須透江さん(44)

事業や家事で忙しい時間をやりくりして塾に通った。〝学生〟だった10カ月間を振り返り、「経営者は時間を振り返り、「経営者は時間をつくる能力が必要。自分で時間を管理して、学ぶための時間を見つけ出していかないと。『時間がない』は言い訳にならない」と実感を込めた。

専務を務める「開運」（市原市）は人材派遣や業務請負などを営む。現社長の母親（74）が創業した。事業引き継ぎが現実味を帯びる中で「労務管理や経理など一から勉強する機会が欲しかった」と塾に参加。「同じ悩みを抱えた異業種の仲間と話し合えて有意義な時間だった。講師も経験豊富でいろいろ相談ができて、毎回充実していた」。

「会社として社長のDNAを引き継ぐ」と母親に深い敬意を抱く。その一方で、女性が働きやすい職場環境づくりや外国人の採用など時代のニーズに合わせた改革も行ってきた。「雇用を生み出し、納税することが地域への貢献にもなる。熱い思いで経営にチャレンジしていきたい」と決意を披歴した。